青年期における親の「死」に関わる危機の捉え方とその過程に関する研究

山本彩留子・岡本祐子

A study on the acceptance process of the crisis with their parents' death in adolescence.

Satoko Yamamoto and Yuko Okamoto

本研究では，青年期の親子関係の視点から，親の死に関わる危機を体験した青年の危機の捉え方の過程と，その特徴について明らかにすることを目的とした。研究Ⅰでは質問紙調査により，親の「死」に関わる危機を体験した青年と，体験していない青年を比較し，その特徴を検討するため分散分析を行った結果，外傷後成長尺度（Taku, et al., 2007）において，親との死別群，親の死に関わる状況体験群が，親の離婚・著しい不和体験群よりも有意に得点が高いことが示された。研究Ⅱでは，親との死別，死に関わる状況を体験した青年に，その体験の捉え方について面接を行った結果，死別において「衝撃」「不安」「否認」「受けとめ」「回避」「情緒的混乱」「小休止」「模索」「納得」「内省」の10個のカテゴリに集約された。これらの状態を行きつ戻りつしながら，危機を客観的に捉え，そして前向きな変化や危機体験からの影響を示す外傷後成長が表れることが明らかとなった。また死別「納得」後も，時間の経過とともに「納得」の内容が変化し，長期間「模索」し続けることが示唆された。

キーワード：青年期，親子関係，親の「死」の危機，外傷後成長

問題と目的

1. 親の死と青年の死別体験

青年期は心理的離乳の時期であり，また親子関係が大きく変化する時期とされている（山岸, 2000）。青年は親を一人の人間として捉えることが可能となる。このような親との関係が重要となる青年期までに，親との関係が脅かされる出来事が生じることもある。青年期の重大なネガティブ・ライフイベントの一つとして，親の死が挙げられる。青年期における両親の死や大病は，どのように感じ体験されていくだろうか。

やまだ・河原・藤野ほか（1999）は，阪神大震災における友人の死を体験した青年にインタビュー調査を行った。その結果，友人の死を通して「いのち」に触れ，自分も例外なくいずれ死ぬのだという事実を自覚し，死の側から生を眺めるようになる語りがなされた。また，やまだら（1999）の一年後に同一の語り手を対象に行われたやまだ・田垣・保坂ほか（2000）では，身近な他者との

死別を「生の意味が問われ，生活が再構造化され，人生を変容させ，成熟をもたらす発達の契機」と捉えている。つまり，身近な人の死に接することは，それ自体に教育機能を持ち，自分の生き方を変えていく契機になると考えられる。

2. 青年の死の捉え方・死生観

青年は死をどのように捉えているのだろうか。青年期を対象とした死に対する態度について，個人の年齢や発達段階によって変化することが先行研究から示されている。丹下（1999）は，青年期において死を主題として扱うことは，その後の人生に対する基盤を形成することにもなると示している。この知見を踏まえ彼女は，青年期における死に対する態度尺度の妥当性の検討から，自我発達および自己受容度と，作成された死に対する態度尺度のいくつかの側面の関連性を示した。これは死に対する態度が一次元的な，恐怖のみを表しているものではないことを示している。加えて丹下（2004）は，青年前期・中期における死に対する態度の変化を調査し，自我発達のレベルの高い人ほど「生」と「死」両方を重く受け止め，かつ「死」を「生」との関わりという視点から捉えていると報告した。

3. ネガティブな経験の意味づけと成長

近年外傷後成長（posttraumatic growth; PTG）が注目され，ストレスを伴う経験が，人に及ぼす影響のポジティブな側面が取り上げられていることが報告されている（東村ら; 2001）。外傷後成長とは，トラウマから苦悩を通してプラスに変容していくことを指し，海外では臨床場面での外傷後成長における適用も進みつつある（開，2006）。

Tedeschi & Calhoun（1996）は，トラウマ的な出来事を経験した人々によって報告された，ポジティブな結果を査定するための外傷後成長尺度を示した。この21項目の尺度は，「新しい可能性」「他者の関係性」「個人的な成長」「精神的な変化」「人生への感謝」によって構成されている。また，女性は男性よりも前向きな側面を報告する傾向にあり，トラウマ的な出来事を経験した人々は，そのような出来事を経験していない人々よりも，ポジティブな変化を報告している。

宅（2004）は高校生において，「ストレス体験と自己成長感をつなぐ循環モデル」を構築した。これは，ストレスフルな出来事にまつわる一連の体験や，その主体としての自分自身に，特別な意味を付与することが，自己成長感を生みだすがゆえに，部分的な自我の強化につながり，次なるストレス体験への予防因として機能する道筋がある可能性を示唆したものである。この主体的な意味づけは，調査の語りでは「ポジティブな側面への焦点づけ」「出来事を経験した自己に対する評価」「出来事の持つメッセージ性のキャッチ」の3つにカテゴリ化されている。またこのモデルは循環的なものであり，成長途上という面が反映されている。Taku, et al.（2007）は，Tedeschi & Calhoun（1996）の尺度を日本人大学生に対して用い，高い内的一貫性があることを結果として示した。また Tedeschi & Calhoun (1996) で示された性差やネガティブな出来事からの経過年数の差が，日本においては関連が見られなかった。

4. 青年における親の「死」の危機の捉え方に関する研究の動向

家族の予期せぬ危機は当事者ではない家族にとっても，人生の道行きの大きな断層となる（岡本，2007）。渡邊・岡本 (2006) では，死別経験による人格的発達の内容を明らかにしているが，対象者

は成人期に集中している。今回青年期に対象者を焦点化することで，病や死に直面した親である当事者や非当事者との関係の変化や，親の危機の捉え方の過程を明らかにすることが可能となると考えられる。また，これらを検討することで，予期せぬ危機を体験している人々に対するケアや，未解決の悲嘆による疾病の予防を捉える一つの手掛かりが得られることが考えられる。

またここで示す親の危機については，次のように捉えることとする。たいていの人は完全に自立していない青年期まで，精神的経済的に親との強い関わりが続いていくと考えられる。子どもが青年期の時，親は中年期であることが多く，子どもは自分の親が死に直面する可能性について深く考えることはそれほど多くはない。そのような時期に，突然親の死や死ぬかもしれないという事態に向き合わざるを得なくなった時，子どもは何を感じ，その体験を人生の過程でどのように捉えていくのだろうか。これらを踏まえ，ここで示す「危機」とは，親の死を考える年齢ではないにも関わらず，予期せぬ危機として親の死や，親が死ぬかもしれないという事実に直面させられる病や事故が起こった場合の，子どもが体験する危機のこととする。また実際に親と死別した場合と，親が死に直面するような状況を体験したが，死はまのがれた場合を総合し，「死」の危機と表記する。

5. 本研究の目的

本研究の目的は，青年期の親子関係の視点から，親の「死」の危機を体験した青年における危機の捉え方の過程とその特徴について明らかにすることである。つまり，彼らが親の危機というネガティブな体験をどのように捉えてきたのか，およびその危機から得られた外傷後成長について検討することを目的とした。

研究 I

1. 目的

研究 I では喪失体験に対する意味の付与と外傷後成長に焦点を当て，質問紙によって親との分離・喪失体験をしていない青年との比較を行い，その特徴を明らかにすることを目的とした。

なお，死生観に関する尺度を用いた理由を以下に示した。親の危機により親を喪失したり喪失するかもしれないことを熟慮することで，青年は死に直面化することになる。その経験がその後の人生に対する基盤に関連していることが考えられる（丹下，1999）。つまり，死にどの程度向き合ってきたかが，ネガティブな体験の意味づけ方に関連すると考え，用いるに至った。

2. 方法

調査対象者　大学生・大学院生・面接調査に協力いただいた社会人を対象に質問紙調査を実施した。回答漏れがあった対象者を除外し，264 名（男性 66 名，女性 181 名，不明 17 名）を分析対象とした。平均年齢は 20.35 歳（$SD = 1.45$），調査時期は 2009 年 4 月～11 月であった。

測定尺度　**①ネガティブ体験に対する意味の付与尺度（以下，意味の付与尺度）**：宅（2005）の 13 項目を用いた。回答は，「まったくあてはまらない～とてもよくあてはまる」（1~4 点）の 4 件法で求めた。**②外傷後成長尺度，日本語版**：Taku, et al.（2007）の 21 項目を用いた。回答は，「全く，経験しなかった」～「かなり強く，経験した」（1~6 点）の 6 件法で求めた。**③死に対する態度尺度**：丹下（2004）の 38 項目を用いた。回答は，「全くそう思わない」～「非常にそう思う」（1~5 点）の

5 件法で求めた。④**フェイスシート**：学年，年齢，性別，ネガティブ・ライフイベントに関する質問の記入を求めた。

手続き　講義終了後，研究と質問紙内容を説明し，承諾を得た協力者に集団で実施した。また，面接調査を先に依頼した方には面接後に質問紙の実施，もしくは後日提出する形をとった。回答所要時間は，10～20 分であった。

3. 結果と考察

(1) 調査協力者のネガティブ・ライフイベントの内訳

質問紙にネガティブなライフイベント 17 個を表にして提示し，その中から調査協力者が体験したネガティブなライフイベントを全て複数回答で選択させた。次にその中から「もっとも大変だった（辛かった・ストレスを感じた）と思う出来事」を記入させた。その結果，ネガティブ・ライフイベントの内訳として，親の「死」：16 名 (6.1%)，親の離婚・不和：31 名 (11.7%)，親との諍い：19 名 (7.2%)，祖父母の死：26 名 (9.8%)，友人の死：11 名 (4.2%)，学校・友人トラブル：63 名 (23.9%)，受験失敗：22 名 (8.3%)，進路：20 名 (7.6%)，恋愛トラブル：17 名 (6.4%)，自身の病・怪我：13 名 (4.9%)，その他：13 名 (4.9%) となった (Figure 1)。

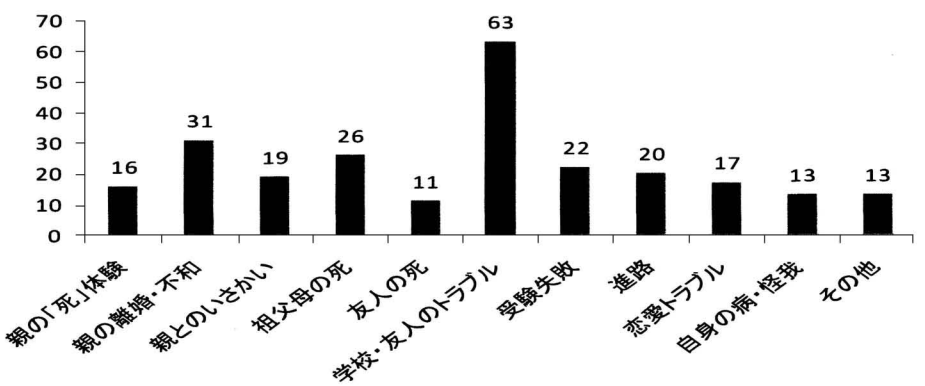

Figure 1. 調査協力者のネガティブ・ライフイベントの内訳

(2) 親との関係の危機による群比較

親との関係の危機による差を検討するため，親の離婚・不和体験群（1 群），親の「死」体験群（2 群），その他群（3 群）に分類し分散分析を行った (Table 1)。1 群は親の離婚・両親の著しい不和を，2 群は親の「死」を，3 群はそれ以外を最も大変だったライフイベントとした群と分類した。その結果，意味の付与尺度では「ポジティブな焦点付け」($p < .01$)，「メッセージ性のキャッチ」($p < .01$)，意味の付与尺度の総得点 ($p < .05$) において 3 群の方が 1 群より有意に得点が高かった。

外傷後成長尺度では「新たな可能性」において 3 群の方が 1 群より有意に高かった($p < .01$)。「精神性的(スピリチュアルな)変容」において 1 群と 2 群，1 群と 3 群の間に有意傾向が見られた($p < .10$)。「人生に対する感謝」において，2 群の方が 1 群より，3 群の方が 1 群より有意に得点が高く ($p < .01$)，2 群と 3 群の間に有意傾向が見られた($p < .10$)。また外傷後成長尺度の総得点において 2 群の方が 1

群より有意に得点が高く($p < .05$)，3 群の方が 1 群より有意に得点が高かった($p < .01$)。死に対する態度尺度では「死後の生活の存在への信念」において 2 群と 3 群の間で有意傾向が見られた($p < .10$)。

Table 1
親との関係の危機による分散分析

	1群 (n =31)		2 群(n = 15)		3群 (n = 196)			
意味の付与尺度	M	SD	M	SD	M	SD	F	多重比較
ポジティブな焦点づけ	2.23	0.72	2.71	0.82	2.83	0.81	F (2,242) = 7.49**	1 < 3**
自己に対する評価	2.00	0.73	1.98	0.90	2.09	0.82	F (2,241) =0.24	
メッセージ性のキャッチ	2.10	0.72	2.60	0.69	2.56	0.82	F (2,240) =4.52*	1 < 3**
総得点	2.11	0.65	2.43	0.73	2.50	0.69	F (2,239) =4.26*	1 < 3*
	1群 (n = 29)		2 群(n = 14)		3群 (n = 188)			
外傷後成長尺度	M	SD	M	SD	M	SD	F	
他者との関係	2.64	1.10	3.13	1.10	3.06	1.06	F (2,233) = 2.15	
新たな可能性	2.14	1.03	2.63	1.28	3.00	1.23	F (2,233) = 6.80**	1 < 3**
人間としての強さ	2.45	1.12	2.50	1.23	2.80	1.15	F (2,230) = 1.48	
精神性的変容	1.47	0.85	2.13	1.09	1.91	1.04	F (2,233) = 3.02†	1 < 2†, 1 < 3†
人生に対する感謝	2.41	1.19	3.93	1.45	3.18	1.31	F (2,233) = 7.74**	1 < 2**, 1 < 3**, 3 < 2†
総得点	2.17	0.87	2.86	1.08	2.80	0.85	F (2,228) = 6.84**	1 < 2*, 1 < 3**
	1 群(n = 30)		2群 (n = 14)		3群 (n = 193)			
死に対する態度尺度	M	SD	M	SD	M	SD	F	
死への恐怖	3.10	0.92	2.92	0.91	3.08	0.76	F (2,234) = 0.29	
生を全うさせる意志	3.95	0.61	4.05	0.63	3.94	0.64	F (2,233) = 0.21	
死の持つ意味	3.57	0.68	3.80	0.65	3.68	0.65	F (2,234) = 0.63	
死の軽視	2.68	0.51	2.55	0.32	2.56	0.61	F (2,233) = 0.60	
死後の生活	2.84	0.88	3.32	0.73	2.72	0.94	F (2,234) = 2.87†	3 < 2 †
身体と精神の死	3.98	0.77	4.00	0.55	3.96	0.81	F (2,234) = 0.02	
総得点	3.33	0.36	3.44	0.29	3.32	0.31	F (2,232) = 0.91	

注）1群：親の離婚・不和体験群, 2群：親の「死」体験群，3群：その他群　　** $p < .01$, * $p < .05$, † $p < .10$

まず 1 群において意味の付与尺度, 外傷後成長尺度の総得点で 3 群よりも有意に得点が低いことが表された。親との離婚という形での分離や，著しい不和という分離するかもしれない不安は，過去の体験ではなく，現在もその危機状態が継続していることが考えられる。そのため，時間が経つことで客観的に捉えられる状態ではなく，現時点ではその体験から前向きな変化を感じたり，ポジティブな意味を付与することに至らなかったことが考えられる。また，親の「死」は，突如として親の身に起きた危機体験であるが，親の離婚・著しい不和は青年と親との関係性にも，大きな影響を与える体験となる。そのため，その危機体験から時間が経過していても，また両親が仲違いするのではないかという不安や，離婚後の親子の関係性への揺らぎにより，危機をポジティブに捉えるには至りにくいことが考えられる。

次に 2 群において外傷後成長尺度の「精神性的変容」「人生に対する感謝」「総得点」で 1 群よりも有意に得点が高いことが表された。親の「死」の危機は，子にとって大きなストレスを抱えることとなるが，時が経ち客観的に捉えられるようになる中で，もしくは死に直面せねばならない状況の中で，精神的な心のよりどころを感じ取ったり，自分の人生に対する重要性を見出しながら，前向きな変化を捉えるようになっていくことが考えられる。また，ネガティブな出来事からポジティブな側面も見出していくことで, 危機体験を捉え直し自己の成長につなげていくことも考えられる。

研究Ⅱ

1. 目的

面接調査により，親の「死」に関わる危機を体験した青年の危機の捉え方の変容過程と，外傷後成長の特徴を検討する。

2. 方法

調査対象・調査時期　研究Ⅰによる質問紙調査の参加者の中で，フェイスシートのネガティブ・ライフイベントにおいて親の「死」体験をしている方，筆者の知人や知人の紹介によって研究への協力を承諾した人12名。調査時期は6月～11月であった。調査対象者のプロフィールはTable 2に示した。

Table 2
調査協力者のプロフィール

対象者	年齢	性別	当事者	容態	体験年齢	職業
親の死に関わる病を体験した青年（死危惧群）						
A	19	F	母親	がん	18	大学2年
B	20	F	父親	胃の異変	8	大学2年
C	20	F	父親	がん	16	大学3年
			母親	がん	20	
D	19	F	父親	倒れる	16	大学2年
E	20	F	父親	心臓病	16	大学3年
F	23	F	母親	がん	10	修士2年
				筋腫	16	
J	21	F	母親	がん	16	大学3年
L	21	F	母親	交通事故	8	大学3年
死別を体験した青年（死別群）						
G	23	F	父親	死	23	社会人
H	23	F	母親	死	20	社会人
I	20	F	母親	死	16	大学3年
K	20	M	父親	死	17	大学3年

手続き　まず氏名，年齢，職業，家族構成，現在の親との同居の有無，危機を体験した方（当事者）との続柄，危機の体験時期を尋ねた。その後，半構造化面接による調査を行った。調査場所は大学の調査室，喫茶店，協力者の自宅で個別に実施した。面接所要時間は30分～150分であり，内容は対象者の承諾を得てICレコーダーに録音した。調査実施前に本研究の目的，得られたデータのプライバシー保護，消去方法について説明を行った。また，調査時の録音，結果の公表についての同意を得たのち，面接承諾書に署名していただいた。なお，面接調査を実施するにあたり，広島大学大学院教育学研究科倫理審査委員会の承認を得ている。

調査内容　最初の教示として「体験された危機について，その時の状況や感じたことなど何でも思いつくままに語ってください」と伝えた。①危機直後から現在における，親の状態の現実的な経過，②危機直後から現在における，対象者の心理的変容，③危機前の親との関係，④環境や他者からのソーシャルサポート，⑤危機体験の捉え方，⑥危機を受けての対象者の人格的発達，変化，影響の6つの視点から構成された。自発的に出てこない箇所は，東村ら（2001），松下（2005, 2008），坂口・柏木（2000）などを参考に作成した質問項目で補足した。

分析方法　①録音をもとに作成した逐語記録から，危機体験の捉え方，体験を通し学んだこと・気づいたことに関する語りを文章単位で抽出し，カード化した。この時文章切片の総数は826個となった。

②西條（2008），前盛・岡本（2008）を参考に，対象者一人一人個別に，語りのカードを時間軸に沿って並べカテゴリ化を行い，個別の捉え方の過程を作成した。

③②の手順を対象者全員分行い，親の死を体験した群（死別群）と親の死に関わる病・事故を体験した群（死危惧群）に語りを分け，類似したものをグルーピングしてカテゴリ化した。得られたカテゴリを下位カテゴリとし，さらに意味が近いものに対しグルーピングを行い上位カテゴリとした。

④③の手順を繰り返すと，最終的に死別群が10個，死危惧群が9個のカテゴリに集約された。最終的に見出されたカテゴリの信頼性を検討するため，臨床心理学を専攻する大学院生2名が独立して評定を行った。評定者間一致率は上位カテゴリにおいて85.85%，下位カテゴリにおいて76.42%であり，一致しない項目は評定者間で協議の上，分類を決定した。

3. 結果と考察

（1）死別群の危機の捉え方の過程と特徴

1）死別群の危機の捉え方の過程

語りの分析の結果，「衝撃」「不安」「否認」「受けとめ」「回避」「情緒的混乱」「小休止」「模索」「納得」「内省」の10個に集約された（Table 3）。この過程をFigure 2に示した。この過程は，病気の発覚や告知により，「衝撃」もしくは「否認」の状態から始まる。「衝撃」を体験した者も，ほぼ同時期に「否認」へと移行していた。つまり危機を自分の体験として捉える「受けとめ」に至る前に，「否認」は必ず通過することが示された。これは，現実として直面する前に一旦距離を置いて客観的に捉え，防衛として「否認することが考えられる。また，「受けとめ」と「否認」を行きつ戻りつすることが示された。これも，厳しい現実に接近・離反を繰り返し，揺さぶられながら受けとめていくことが表されていると考えられる。

次の段階として，「回避」「情緒的混乱」「小休止」の状態が示された。「回避」は自分の体験として危機を捉えながらも，その現実に向き合うことが辛く，一時的に距離をとったり，自分から切り離す状態である。この「回避」と，現実に向き合った際に生じる「情緒的混乱」と行きつ戻りつすることが明らかになった。当事者の病態が悪くなり，死が接近していることを感じながら，自己を保つため「回避」を用いて日々を過ごす「小休止」は，がんの闘病をした当事者を持つ対象者特有の状態であった。これは，長期闘病の中で投薬が効き，一時的に訪れる小康状態の時期に示される。これは，死危惧群のプロセスにおける「安心」に該当すると考えられる。「不安」がこの段階で収束

Table 3

各カテゴリの特徴と下位カテゴリ

カテゴリ	各カテゴリの特徴と＜下位カテゴリ＞
衝撃	病の告知，または当事者の症状を知った直後の心理的な衝撃。 〈ショック〉〈信じられない想い〉〈感情の爆発〉**〈当事者の変化〉**
不安	危機を理解し，先行きが不明瞭であることから生じる，長期に渡って持続する不安定な状態。 〈現実的な不安〉〈漠然とした不安〉〈病気への不安〉**〈当事者への不安〉〈家族の不安〉** **〈病かどうかのアンビバレント〉**
否認	危機を理解しているものの，一定の距離を置いており，大きな反応は生じない状態。 〈冷静〉〈感情の鈍麻〉〈変化なし〉〈楽観〉**〈病気の無理解〉**
受けとめ	死に直面した状態を自己の重要な体験として，実感を伴って認識している反応。 〈信じる気持ち〉〈覚悟〉〈直面〉**〈切望〉〈危機の実感〉**
回避	危機的状況に対し，自己の体験として実感を伴って受けとめるまでの，自己を護るための自己と向き合わない反応。 〈逃避〉〈現実感のなさ〉**〈話題の回避〉〈死の回避〉〈親の回避〉〈配慮からの回避〉〈平静を装う〉**
情緒的混乱	時間経過に伴い生じる，死に直面した状況からの混乱した心的状態。 〈心配〉〈生死のアンビバレント〉〈辛さの共有〉〈葛藤〉〈寂しさ〉〈孤独〉〈当事者への苛立ち〉 〈世界の揺らぎ〉〈身体的辛さ〉**〈死の恐怖〉〈感情のわだかまり〉**
小休止	一時的な，長期闘病の小康状態から生じる安堵した状態。
模索	親の死の意味を，自分なりに捉えようと探っていく状態。〈未整理〉〈苦悩〉〈内的模索〉
納得	死別時点における自分なりに親の死を受け入れている状態。〈死の実感〉〈諦観〉〈知的な理解〉
安心	多少の不安を抱えている場合もあるが，ある程度落ち着きを取り戻している状態。 **〈退院への安心〉〈病状への安心〉〈現状への安心〉〈命への安心〉〈医師の評判〉**
早期完了	親の死ぬかもしれない状況に直面せず防衛している面もあるが，現時点では当時の体験と距離を取って完結させている状態。**〈凍結〉〈未発達〉〈曖昧な納得〉**
内省	危機終息後，当事者との関係を振り返り，自身の行動を顧みたり，将来の当事者や自分自身に対する，病の影響を想う状態。 〈後悔〉〈罪意識〉**〈反省〉〈当事者の予後の不安〉〈自身の身体への不安〉**

注）下線は死別群のみ，ゴシック体は死危惧群のみに見られたもの。

しているのは，「亡くなってしまうのではないか」「いつ亡くなってしまうのか」といった不安は現実のものとなり，いよいよ死に直面するためである。

死を体験した後，「模索」「納得」「内省」の状態となる。この状態に至るまでには前段階と何度も行きつ戻りつし，ようやく自身の体験を「納得」することが可能となることが示された。死別体験をどう捉えるべきか「模索」して「納得」に至る場合もあるが，一旦「納得」したとしても，時間

の経過とともにその「納得」の形は変化していき，長期間「模索」し続ける。また，「納得」の後，亡くなった当事者と自己との関係を振り返り，「内省」に至ることも示された。これは，自己を護るために距離をとるのではなく，「情緒的混乱」や「回避」を経た後，死別という現実を受け入れた上で，危機について顧みたり，当事者自身に想いを馳せることが可能となった時に表れる。そして死別を，一つの体験として捉えられるようになった時，ネガティブな体験としてだけでなく，前向きな変化や危機体験による影響について考える，外傷後成長や変化に至る。

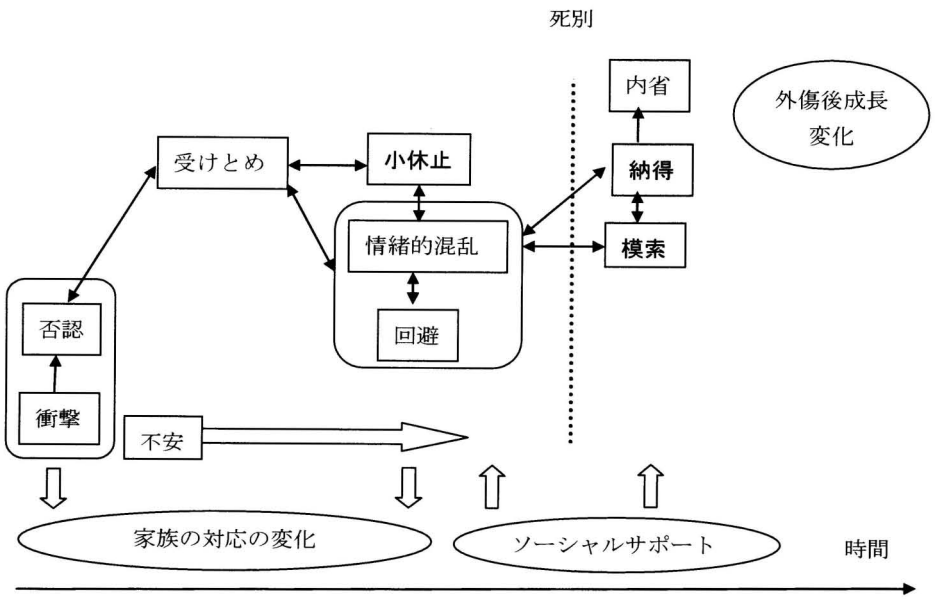

Figure 2. 死別群の危機の捉え方の過程

注 1) ◀▶ は行きつ戻りつのプロセスを示す。
注 2) ゴシック体は各群のみに見られるものである。
注 3) ▭ はどちらか一方のみ通過する場合も含まれる。

2) 死別群の危機の捉え方の特徴

次に下位カテゴリにみられた，死別群の特徴を示す。「回避」における “逃避” は現実に直面し続けるのが辛く，物理的に当事者もしくは家族と距離を置くことであり，親のがんを体験した対象者両者とも該当している。このことからも，長期的に当事者と関わる中で，一時的に物理的距離を取り，自己を保とうとすることが考えられる。“現実感のなさ” は，悪化する病や死を，自分の身に起きている現実として捉えられていない状態であり，長期入院を経験した当事者を持つ，3 名全員が該当している。小此木（1991）は対象を失ったことによる分離不安，あるいは見捨てられ不安，悲哀の苦痛を一挙に解消する試みとして，喪（mourning）に対する防衛機制を示している。本研究で示されている「回避」は，この中の躁的防衛にある現実逃避に当たることが考えられる。この防衛機制は，失った対象に対して無関心な態度をとることとあり，一時的に心の苦痛を回避するために必要な術策と考えられる。

「情緒的混乱」における “生死のアンビバレント” に関して，当事者の病状が安定した際に，順

調に治っているのではないかという想いと，医師からの余命の宣告という現実の狭間で，青年が揺れ動いている様子が示されている。脊椎損傷者の障害受容過程を示した小嶋（2004）において，時間が経てば完治すると信じる「完治への期待」が示されているが，本研究では危機の当事者ではなく，その子どもである青年を対象としているため，“期待”や“死の回避”のみでなく，一方で現実も把握しており，両価的な状態が示されたと考えられる。また，この“生死のアンビバレント”は親のがん闘病を体験された対象者に含まれており，薬が効き，病気が一旦小康状態となるがんに特有の状態であることも考えられる。“葛藤”では当事者への想いと，介護など家族全体の辛さとの間で葛藤している様子が語られている。“世界の揺らぎ”では，死という「影の世界」と世間の普段通りの日常のギャップを体験し，その中で過ごしていくことの辛さが語られている。山本（1997）は，死にゆく人に付き添う家族の課題は，決して悲しみ，断念する課題のみが前景にでるのではなく，凝縮された「今」という時をともに生き抜き，やり残した仕事を手伝い，家族の絆を再確認することも大事な課題となる。“葛藤” や“世界の揺らぎ”は，まさに「今」という時をともに生き抜いたからこそ，見られる状態と考えられる。

「模索」は当事者の死後，闘病も含めた一連の出来事を振り返り，どのように捉えていくか探る状態である。“未整理”はその出来事や，当時の自分の感情をどう整理していくか思案している状態である。“内的模索”は当時の感情を自分の中で探る作業を示している。つまり，当事者との死別を経験したことで，青年は自己の内面と向き合うこととなり，同時に亡くなった当事者とも向き合い，やがて死者を内在化していくと推察される。「模索」は，死者を内在化していくために表現される局面であることが考えられる。

「納得」は，死別時点でその死をどう捉え受け入れたかが示されている。“死の実感”は，親の死を現実として感じさせられた状態であり，死別後，時間が経過してから見られることもあることが示された。またこの状態には対象者 4 人全員が該当していることからも，親の死を受けとめ認識する，一つのターニングポイントとなると考えられる。“諦観”はそれまでに死を“覚悟”した上で，死別を超然と見ている状態であり，感情を露わに出さず捉えていることが考えられる。この状態は死という出来事に対しても一旦は距離を置くことで，“死の実感”を伴って受けとめるまで，準備を行っていることが考えられる。“知的な理解”は悲嘆の段階を学ぶことで，“孤独”が癒されていくことを示す対象者がいる一方，そのような知的な理解では不十分で，役に立たなかったと語る対象者も存在し，相反する結果となった。これは死別してから初めて悲嘆に関して学んだ場合と，悲嘆の段階について認識した後に死別した場合で，その受け取り方が異なっているためと考えられる。

「内省」は，死別後当事者と自身の関係を振り返り，自身の行動を顧みる状態である。特に死別群のプロセスにおいて特徴的なのは“罪意識”である。これは客観的事実であるかどうかとは関係なく，対象者の心的現実として，自身の行動や思考が当事者の死を早めたのではないかと苦悩し，罪意識に苛まされる状態である。その答えの出ない苦悩に直面しながら，その苦しみを昇華させるための成長や自身の行動の変化に，つながっていくと考えられる。

(2) 死危惧群の危機の捉え方の過程と特徴

1) 死危惧群の危機の捉え方の過程

死危惧群の語りの分析の結果，「衝撃」「不安」「否認」「受けとめ」「回避」「情緒的混乱」「安心」「早期完了」「内省」の 9 個に集約された（Table 1）。この過程を Figure 3 に示した。まず危機直後は「衝撃」「否認」「受けとめ」と，死別群と同じ経過をたどる。時間の経過とともに，「回避」と「情緒的混乱」を行きつ戻りつする段階へと移行する。その後，当事者の病状や状態が危機を脱し，落ち着き安定することで「安心」「早期完了」「内省」となる。「安心」は今までの危機的状況が落ち着き，ひとまず安心した状態であるため，「安心」が「回避」や「情緒的混乱」との間で揺れることが見られた。また一旦は「安心」に至っても，現時点で当事者や病に向き合うことなく，「回避」に留まっている対象者も存在することが明らかとなった。「安心」に至った後，自分なりに納得させる「早期完了」を通過する対象者も少なからず存在した。まだ完全に向き合う所に至らずに，自分なりの捉え方を試行錯誤しながら探り，一時的に完了させていることが考えられる。

加えて，状況が落ち着き当事者との心理的距離が保てる状態になった時，「内省」が生じる。死危惧群において，この「内省」に当事者の予後に対してや，自分自身が将来その病気になるのではないかという予期不安が含まれていた。そのため，危機直後から生じる「不安」は消えることなく，その内容は予期不安へと変化しながら，当事者の病態が安定した後も継続することが示された。これらの一連の状態を経て，危機を客観的に捉え，その中で前向きな変化や危機的状況による影響を考える，外傷後成長や変化へとつながっていくことが示された。

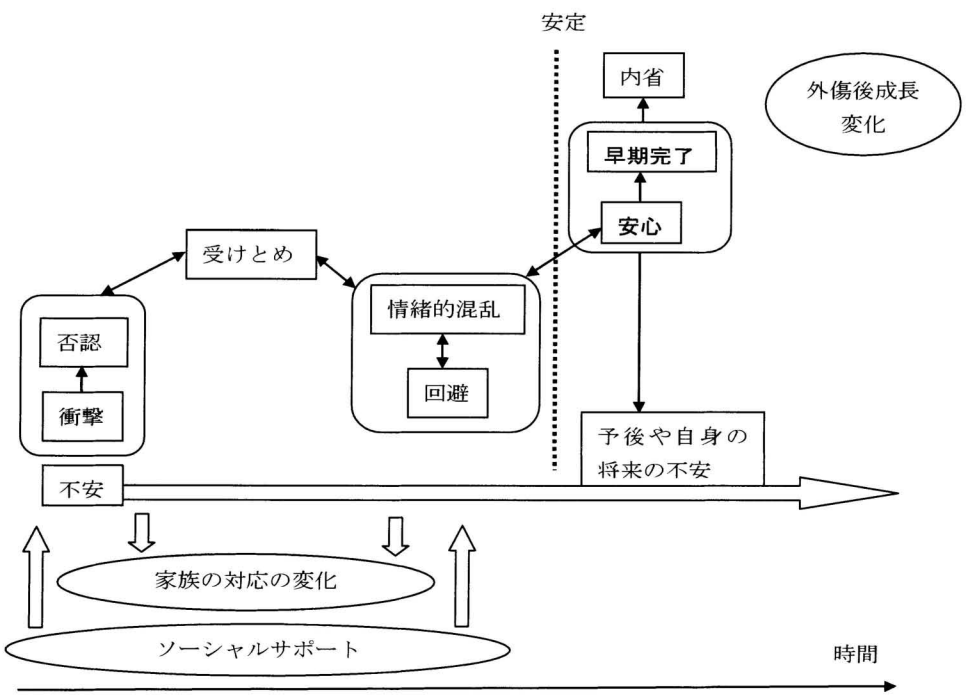

Figure 3. 死危惧群の危機の捉え方の過程

2）死危惧群の危機の捉え方の特徴

次に下位カテゴリにみられた，死危惧群の特徴を示す。「受けとめ」の“切望”は危機的状況を認識した直後の，なんとしてでも治って欲しい，助かって欲しいという願いが示されている。これは死と病・事故の違いというよりもむしろ，危機的状況を知った時の当事者の状況に因るものであると考えられる。実際，“切望”を体験した対象者の親が，対象者がその状況を知った時，生死を彷徨うほどの状況であったり，対象者が小学校低学年というかなり幼い頃である。“切望”の局面は，それらの影響を含んでいると考えられる。

死危惧群の「回避」の特徴として，病や事故それ自体を回避しようとする傾向が強いことが挙げられる。これは，死の場合，刻一刻と近づいてくるもので直面せざるを得ないものであり，回避しきれるものではないが，病や事故の場合，現在当事者が存命であることからも分かるように，長期的に回避することで，自分の体験として受けとめるまで，時間的に猶予を伸ばしていることが考えられる。つまり，親の死ぬかもしれない状況を，自分の体験として実感を伴って捉えるまでには，青年の場合長い時間を要することが考えられる。一方，“配慮からの回避”は，当事者が触れて欲しくなさそうな様子であることを察して，話題にすることを避ける状態である。また“親の回避”は当事者もしくは非当事者の親が，青年に対し敢えて話題にすることを避ける状態である。これらの状態から「回避」は，親の病態を受け入れられないための，自分を護る反応のみではなく，当事者を含めた親もまた，自分がその状態を受け止めきれない，もしくは子どもは受けとめられないのではと配慮し話題に出さないことが示された。また，青年が当事者に対し病態について話題にすることで，親が辛い想いをするのではと配慮から回避することも示された。加えて「回避」から“曖昧な納得”をして完結している人も見受けられた。つまり，現時点で当事者の状態が落ち着いているため，直面する必要なくそのまま過ごしていることが考えられる。時間が経過し客観的に振り返られるようになった時点で，徐々に直面していくことが推測される。

「情緒的混乱」の“死の恐怖”は「死ぬかもしれない」状況に直面し，最悪の事態を想定することで湧き上がる恐怖であり，対象者の9名中4名の対象者が該当していた。この状態は，当事者が亡くなっていないからこそ，示される局面であると考えられる。また“当事者への苛立ち”が対象者の9名中3名が該当し，病によって，今まで対象者が気付かなかった当事者のネガティブな側面を目の当たりにしたことから生じたと考えられる。

「早期完了」の“凍結”は親の危機を，現時点では触れないもの，なかったものとして遠ざけている状態を指す。“曖昧な納得”は明確な完治や病状に触れないが，当事者の状態や様子から大丈夫だろうと推測し，納得している状態を指す。つまり「早期完了」は当事者の病状が落ち着いたことにより，直接危機的状況に向き合うことなく，完結している状態も含んでいることを表している。

「内省」の“反省”“後悔”において，危機体験による自身の行動の変化など，外傷後成長につながるプロセスが見られた。また“当事者の予後の不安”や“自身の身体への不安”という現時点でも続く不安が示された。「不安」は危機体験直後から形を変えながら，長期に渡って継続することが明らかになった。“自身の身体への不安”の該当者は全員，当事者ががんの罹患者であり，がんは遺伝的要因もあるという事実を知ったことで，将来罹患するのではないかという不安が生じたと考えられる。

またこの予期的な不安から，当事者の状況と距離をとる一方，“自身の身体への不安”に直面する形で，危機に取り組んでいることが考えられる。

(3) 死別群の外傷後成長・変化

親との死別を振り返り，影響を受けたこと，変化に関する語りをまとめて分析した結果，「体験の捉え方の変化」「親理解の深化・再認識」「他者関係の深化」「新たな行動・内的な視点の獲得」「生に対する思索」「死に対する思索」の6個のカテゴリに集約された。この6個のカテゴリを親の死を体験した青年の外傷後成長・変化の内容とした（Table 4 ）。

次に死別群における外傷後成長・変化の特徴を示す。「親理解の深化・再認識」において，“当事者との再結合”“当事者への思慕”“当事者からの直接的影響”は，当事者が亡くなった後に，その存在の連続性や存在感の大きさが感じられる状態である。山本（1997）は故人に対する思慕について，以下のように記している。「悲しむ者は，失われた対象を求めて，生前あるいは離別前よりも深い内的交流と再結合の希求を経験する。愛する者のことを喪失前には十分に知ろうともせず，回避さえしていても，喪失後はすべてに直面せざるを得なくなる。そして，失われたものを取り戻すべく，悲嘆の彼岸に探し求める」。また山本・濱崎・玉井・山崎（2004）では，モーニングワークは死者との「絆」を結び直す作業であり，「共に生き続ける」営みとなることも提示している。小此木（1991）は，喪（mourning）における心的機制として，まず失った対象に対する思慕と執着が続き，喪失を否認し，失った対象の再生と対象に対する美化ないし理想化が起こる。そして失った対象を失うまいとし，心の中で保持しようとする場合に，その失った対象と心の中で対話を続ける。取り入れは同一化を作り出し，失った人物になり変ってしまうことで，悲哀の苦痛と思慕の情を克服することを示した。これらの作業を進めていく中で，物理的には対象は不在ではあるが，心理的結合状態となり，その存在を内在化していくことが考えられる。

「他者関係の深化」において，“他者への関わりに対する当事者の影響”は，人と関わる場面で，当事者ならこの時どうするかと想定しながら関わることを表している。この状態は，喪失対象の考えを取り込み，一体化しつつあることを示している。山本（1997）は，喪失の様態Cの心理的課題である「希望の課題」の主要経路の一つに，愛する人を心の中に蘇らせる復活の過程があり，それは喪失者の「同一化・取り入れ・内在化」に関連する再建過程であるとした。この内的な復活の達成により，喪失対象への過剰な拘束から「解放」され，真の離脱と断念が一応完了すると示した。

「新たな行動・内的な視点の獲得」において，“話すことの重要性”は，死別を含めた危機体験を他者に話すことで，癒されたり楽になることを実感したことを示す。やまだら（1999）や遠藤（2002）においても，死別体験を言葉によって他者に語るという「共有化」が大きな意味を持つと報告しており，先行研究と合致する結果となった。

「死に対する思索」の“死の捉え方”では，ネガティブに捉えていた「死」を避けることはできないが，前向きに捉えようとする変化が示された。“自分の死”では，親の死によって，自らの死も具体的にイメージするようになったことが表された。つまり，ただ死を身近に感じるだけでなく，いずれは自身に起こることを想定し，自身の行動や考えを変化させていることが明らかになった。

Table 4

外傷後成長・変化における上位カテゴリの特徴と下位カテゴリ

上位カテゴリ	特徴と＜下位カテゴリ＞
体験の捉え	現在から危機体験を振り返った際の，その体験の捉え方。 ＜ポジティブな捉え方＞＜過去として捉える＞＜これからの捉え＞ **＜仮定して考える＞**
親理解の深化・再認識	危機体験後，非当事者を含めた両親の理解が深まったり，改めて認識し直したことを表す。 ＜当事者への関わり＞＜当事者の捉え方＞＜当事者からの直接的影響＞＜非当事者の捉え方＞＜当事者との再結合＞＜当事者への思慕＞＜非当事者への関わり＞＜家族の変化＞**＜親の老い＞＜親の死の接近＞＜親孝行＞** **＜ネガティブな関わり＞＜親の存在の再認識＞＜家族の存在の再認識＞**
他者関係の深化	危機体験後，他者に対してより深い理解ができるようになったことを表す。 ＜他者への関わり＞＜他者の捉え方＞＜他者の捉え方に対する当事者の影響＞
新たな行動・内的な視点の獲得	危機体験後，行動や内的な視点を新たに獲得したことを表す。 ＜話すことの重要性＞＜危機状況に生かす＞＜価値観の変化＞ ＜自己感覚の拡大＞＜家族での役割＞**＜自身の将来に生かす＞＜対処＞** **＜同じ体験者に生かす＞＜自身に対する学び＞**
生に対する思索	危機体験後，様々な視点から生きることに対し思索を行っていることを表す。 ＜将来への影響＞＜生への姿勢＞＜学問への興味＞**＜模索＞**
死に対する思索	危機体験後，様々な視点から「死」に対し思索を行っていることを表す。 ＜時間の有限性＞＜死への接近＞＜死の捉え方＞＜自分の死＞ **＜自分の死へのイメージのなさ＞**

注）下線は死別群のみ，ゴシック体は死危惧群のみに見られたもの。

（4）死危惧群の外傷後成長・変化

親の死ぬかもしれない状況を振り返り，影響を受けたこと，変化に関する語りをまとめて分析した結果，「体験の捉え方の変化」「親理解の深化・再認識」「他者関係の深化」「新たな行動の獲得」「生に対する思索」「死に対する思索」の6個のカテゴリに集約された。この6個のカテゴリを死危惧群の外傷後成長と変化の内容とした（Table 4）。これらは死別群と同様のカテゴリであったが，以下に述べる点で両群の間に異なる特徴が見られた。

「体験の捉え方の変化」の“過去として捉える”では，危機体験を過去として捉え，その出来事を将来へつなげていかない状態である。これは，「安心」や「早期完了」によって一区切りついており，現時点ではそれ以上思索しない，もしくはしないようにしていることが考えられる。実際に当事者の状態が落ち着いており，対象者にとって過去となっていることもあるが，一種の防衛であること

も考えられる。危機体験について思索せず，現時点では“凍結”していることも推察される。

「親理解の深化・再認識」において，“親の老い”“親の死の接近”“親孝行”は死危惧群特有の変化である。特に“親の死の接近”は対象者9名中6名が該当している。これは，親が死に接近する状態に直面することで，これまでして来なかった接触の強化を行い，絆の再確認を行っていこうとする働きから来ると考えられる。山本（1997）は愛着対象における喪失様態のモデル化を行い，その様態Aにおいて，当事者との現実的な接触の回復・強化と絆の再統合が，心理的課題となると記している。死危惧群では，当事者は存命であるため，当事者の存在の重要性に気づき，危機的状況がある程度安定した後，この作業に取り組むことが考えられる。

「生に対する思索」は死別群と類似した下位カテゴリによって構成された。つまり，自分自身の人生を「生きること」への姿勢は，死別，病・事故に関わらず，大きな影響を受けることが示された。また，“模索”は親の病を受けて，当事者への再接近・再接触の欲求が高まると同時に，自分自身のやりたいこと，自分の人生を生きることも求めており，両者が一致せず，どこで折り合いをつけていくのか，現在模索中の状態を示している。つまり，家族や当事者との「関係性」と，自分自身の「個」との間で，今後どのように生きていくかについて葛藤状態が生じていることが明らかになった。本研究では対象者が9名中8名が大学生であり，これから進路選択の対象者も多かったことも反映された結果となったと考えられる。

「死に対する思索」において，死別群で見られた“死の捉え方”の変化は見られなかった。これは実際に死別を体験したのではないため，死自体の捉え方が大きく変化しなかったと推察される。“自分の死へのイメージのなさ”は，死に直面したのは親であって自分ではないため，直接自分の死を思索することはなかったことを表している。つまり，自分の死と結びつけないことが，死を遠ざけたり回避するための，一種の防衛であることも示唆される。自身とは関係のないこととして捉えることで，死そのものだけでなく親の病とも距離を置き，自己を護っていることも考えられる。

総合考察

本研究では研究Ⅰにおいて，親の「死」に関わる危機を体験した青年と，親の危機を体験していない青年を比較し，危機の捉え方の特徴を検討した。研究Ⅱでは面接調査により，親の「死」に関わる危機を体験した青年の危機の捉え方の過程と，外傷後成長の特徴を質的に検討した。ここでは研究Ⅰ，研究Ⅱを総合して考察する。

まず，研究Ⅰにおいて親の「死」に関わる危機を体験した青年と，体験していない青年を比較し，外傷後成長の得点が有意に高いことが示されたが，その内容まで明らかにすることはできなかった。そこで，研究Ⅱで面接調査を行うことにより，外傷後成長を質的に明らかにすることができた。また，研究Ⅰでは現在からの危機の捉え方という視点から検討したが，その過程を追っていくことが研究Ⅱでは可能となった。現在その危機のポジティブな側面を捉えることが可能になったとしても，それだけでは危機直後から現在までどのような経過があったのか把握できない。面接調査によってその変遷を質的に細かく捉えていくことで，“点”から“線”へとつながったと考えられる。

第二に，研究Ⅰでは死に対する態度において，「死」の危機を体験した青年と体験していない青年

の間で，有意な差はほとんど見られなかったが，研究Ⅱの「死に対する思索」によって，親の「死」の危機を体験した青年の，死に対する態度の質的な特徴が明らかになった。特に“自分の死”は，死別群に表れやすい特徴であり，死危惧群との違いについても明らかになった。

本研究により，青年が親の「死」の危機をどのように捉え，成長感や変化を感じているのか実証的に示された。山本（1997）は，「悲哀の過程」は，外的現実と内的経験の狭間を激しく揺れながら，喪失対象への拘束から徐々に解放され，回復へと成熟へと向かう過程であるとした。そして一般的な死別における喪失—悲哀の過程を鳥瞰的に捉えるならば，まず永別の先取りと予感に始まり，死による衝撃と内的世界の崩壊の段階を経て，喪失対象の補償的な復活と「世界」の再建へと移行することを示した。また，山本・濱崎・玉井・山崎（2004）において，モーニングワークでは内的営みと外的営みの二面が機能することが必要であり，喪の仕事においては，死者と対話する内的世界と生者と対話する外的世界の両方に，錨を下ろさねばならないことを示した。これらの先行研究に示されているように本研究より，外的現実と内的経験，外的営みと内的営みの間を揺れながら，回復し成熟していく過程が，一部実証された。またこれらの結果は，臨床場面において親の「死」に直面せざるを得ない状況に陥った青年に対する，心理的援助を考慮する一助になると考えられる。

ただし，本研究にはいくつかの課題も残されている。まず研究Ⅱにおいて男性の対象者が1名のみであったため，性差を明らかにできなかった。Tedeschi & Calhoun（1996）においては外傷後成長において性差が見られた一方，Taku et al.（2007）では性差が見られなかった結果が示されている。これらを踏まえ，今後面接調査において，質的な性差を明らかにする必要がある。また，今後比較対象として，祖父母や友人などの重要な他者との死別を面接調査することによって，死別による差異が明らかにする必要である。今回は親の「死」の危機に焦点に絞っているが，今後重要な他者との死別を比較対象とする視点も重要であると考えられる。

引用文献

遠藤みち恵 (2002). 中年期健常者の親の死の受容と悲嘆のプロセス 心理臨床学研究, **19**, 630-637.

東村奈緒美・坂口幸弘・柏木哲夫・恒藤 暁 (2001). 死別体験による遺族の人間的成長 死の臨床, **24**, 69-74.

開 浩一 (2006). Posttraumatic Growth（外傷後成長）を促すものは何か—変容過程に視点を置いて— 長崎ウエスレヤン大学現代社会学部紀要, **4**, 75-84.

小嶋由香 (2004). 脊椎損傷者の障害受容過程 受傷時の発達段階との関連から 心理臨床学研究, **22**, 417-428.

前盛ひとみ・岡本祐子 (2008). 重症心身障害児の母親における障害受容過程と子どもの死に対する捉え方との関連—母子分離の視点から— 心理臨床学研究, **26**, 171-183.

松下智子 (2005). ネガティブな経験の意味づけ方と開示抵抗感に関する研究. 心理学研究, **76**, 480-485.

松下智子 (2008). ネガティブな経験の意味づけ方の変化過程—肯定的な意味づけに注目して— 九州大学心理学研究, **9**, 101-110.

岡本祐子 (2007). アイデンティティ生涯発達論の展開 ミネルヴァ書房.

小此木啓吾(1991). 対象喪失と悲哀の仕事 精神分析研究, **34**, 294-322.

西條剛央 (2007). ライブ講義・質的研究とは何か SCQRM ベーシック編—研究の着想からデータ収集, 分析, モデル構築まで— 新曜社.

坂口幸弘・柏木哲夫 (2000). 死別の適応とその指標. 日本保健医療行動科学会年報, **15**, 1-10.

宅 香菜子 (2004). 高校生における「ストレス体験と自己成長感をつなぐ循環モデル」の構築—自我の発達プロセスのさらなる理解にむけて— 心理臨床学研究, **22**, 181-186.

宅 香菜子 (2005). ストレスに起因する自己成長感が生じるメカニズムの検討—ストレスに対する意味の付与に着目して— 心理臨床学研究, **23**, 161-172.

Taku K., Calhoun, G. L., Tedeschi, G. R., Gil-rivas, V., Kilmer, P. R., & Cann, A. (2007). Examining posttraumatic growth among Japanese university students. Anxiety, *Stress & Coping*, **20**, 353-367.

丹下智香子 (1999). 青年期における死に対する態度尺度の構成および妥当性・信頼性の検討 心理学研究, **70**, 327-332.

丹下智香子 (2004). 青年前期・中期における死に対する態度の変化 発達心理学研究, **15**, 65-76.

Tedeschi, G. R., & Calhoun G. L. (1996). The posttraumatic growth inventory: Measuring the positive legacy of trauma. *Journal of Traumatic Stress*, **9**, 455-471.

渡邊照美・岡本祐子 (2006). 身近な他者との死別を通した人格的発達—がんで近親者を亡くされた方への面接調査から— 質的心理学研究, **5**, 99-120.

やまだようこ・河原紀子・藤野友紀・小原佳代・田垣正晋・藤田志穂・堀川学 (1999). 人は身近な「死者」から何を学ぶか：阪神大震災における「友人の死の体験」の語りより 教育方法の研究, **2**, 61-78.

やまだようこ・田垣正晋・保坂裕子・近藤和美 (2000). 阪神大震災における「友人の死の体験」の語りと語り直し 教育方法の研究, **3**, 63-81.

山岸明子 (2000). 女子青年によって再構成された幼少期から現在にかけての母親との関係 青年心理学研究, **12**, 31-46.

山本 力 (1997). 喪失の様態と悲哀の仕事 心理臨床学研究, **14**, 403-414.

山本 力・濱崎 碧・玉井千里・山崎芙美子 (2004). ある被害者遺族の有効なモーニングワークに関する質的分析—ラガーシュ仮説の再検討を含めて— 岡山大学教育実践総合センター紀要, **4**, 137-145.